初期デリダにおける超越論的哲学の問題[1]

鈴木康則*

1　デリダの思想形成に関する予備考察

『フッサール哲学における発生の問題』[2]は、フッサールの哲学的営みにかんして「発生」という問題設定からデリダが検討を加えている著作である。一九五三年から五四年にかけて執筆され、一九九〇年に出版されたこの著作において、後にデリダが自らの問題意識として積極的に展開することになるいくつかのテーマ、たとえば「差延」や「脱構築」に繋がるような問題系を見て取ることも可能であろう。出版された際に付加された「はじめにAvertissement」において、彼は自分の著作を「三十年以上も」読んでいなかったにもかかわらず、起源における「錯綜 complication」や「混交 contamination」が読解を支えていたことを指摘している([PG, VI–VII/viii])。また後のインタビューにおいても、これらの戦略から出発して自らの思想が展開されたことを認めている([Derrida 1999, 86/125–126])。

ではこの「展開」の内容はどのようなものであろうか。たとえばフッサール読解を続けることにおいて、『発生の問題』で頻繁に用いられた「弁証法」という語は、後にはほとんど用いられなくなるという事情が思い起こされるだろう。この事情についてはデリダ自身が「はじめに」において語っている。

> このようにして開始された読解を私が『幾何学の起源』への「序論」（一九六二年）と『声と現象』（一九六七年）のなかで継続していたというのに、「弁証法」という語は、最終的に完全に消え去るか、あるいは更に、それなしで、あるいはそれから離れたところで、差延や起源における代補や痕跡を考えねばならなかったその当のものを指し示す([PG, VII–VIII/ix])。

この回想では、デリダが『発生の問題』で提起した読解がその後も「継続」していたということ、また「弁証法」という語自体の使用が無くなる、あるいは減ったとしても、その語が用いられていた背景となる哲学的意図にかんしては、後年においてもその妥当性は認められていることが確認できると言えよう。

これらの言葉をそのまま受け容れるならば、デリダの思想は彼自身が言う通りに、出発点としての読解が単に「継続」あるいは発展していたと考えることになるだろう。しかし『発生の問題』の後に出版された『フッサールの幾何学の起源、序文と訳』[3]を参照するな

* 慶應義塾大学文学研究科哲学倫理学専攻後期博士課程、慶應義塾大学先導研究センター（CARLS）非常勤研究員

1 本稿は二〇〇八年日仏哲学会で発表された原稿に、加筆・修正を加えたものである。

2 以降『発生の問題』と略記する。

3 以降『幾何学序文』と略記する。

らば、こうした単純な解釈を保持するのは難しいようにも思われる。というのも後で確認するように、『発生の問題』で表明されていた見解と『幾何学序文』での立場には、少なくとも表面上の食い違いが生じているように見えるからである。その食い違いは、フッサールにおける歴史の哲学をめぐる問題系において生じていると考えられる。

本稿の目的は、この食い違いをまずは浮かび上がらせ、その意味にかんしての考察を行うことである。そしてその考察は、まだデリダの遺稿の確認作業がまだできない現状にあって、デリダ思想の生成を論じるための予備的解釈を提供することも同時に目的としている。ここで論じられる問題は「脱構築」と呼ばれる彼の思想において、重要な主題を形成することになると思われるからである。

ここで述べた食い違いにかんしては、デリダ自身はほとんど語っていない。だが彼は自分の論文を読み直すことで、「私のなかで増していった諸々の不安や躊躇や更には反論」([PG, V/v])を感じていたことを告白している。「弁証法」という語の使用頻度の低下は、それが名指そうとする事態への問題意識が変化したことを必ずしも意味しない。ではデリダの感じる「不安」や「反論」とはいったいどのような点においてなのか。この「不安」を全て明らかにすることはおそらく不可能であろうが、『発生の問題』のうちにデリダの未成熟な思考の幾つかを指摘することもできよう。ある人物の著作や文章に、連続性を見出す、あるいは見出せるということは、既に哲学的な解釈である。だが連続性を認めることで、本来は異質である思考も、同一なものとみなして解釈してしまうこともあるのではないだろうか。そうであるなら、同一人物の幾つかのテキストの間に断絶を見出すことも、なお解釈でありうるのではないだろうか。デリダの著作を読む場合、その思想がはじめから完全に成熟した姿で現れていたというより、いくつかの方針転換を含みつつ、成熟しながら形成されていったとも考えられる。この点を確認するためには、デリダの著作において、そのような成熟や発展の有無を検証しなければならないだろう。後で述べるとおり、『発生の問題』と『幾何学序文』における読解の「ずれ」は、デリダ自身の思想形成として重要な論点になると思われるが、両者の差異を記述する前に、『発生の問題』それ自身におけるフッサール読解についてもやや詳しく立ち入る必要がある。というのも、『発生の問題』それ自身においても、性質の異なる読解が行われているように思われるからである。

2　『発生の問題』における論述構成の問題

『発生の問題』の構成を確認すると、一九九〇年の出版の際に付加された「はじめに Avertissement」に続き、「発生という主題と主題の発生」と題された「序論 Avant-Propos」、その後に「序文 Introduction」と本論である第一部から第四部という内容になっている。「序文」はそれに続く第一部から第四部までの要約であるが、「序論」は論文全体の単なる要約ではない。デリダは「この長文の予備考察は、元々は、本論である歴史的研究の導入部となるべきものではなかった」([PG, 1/289])と認めながらも、その予備考察が「幾ばくかの光を投射しうるであろう限りで」([PG, 1/290])、この考察を提示することを是とした、と述べている。もともと別の目的に書かれたものであるのだから、内容に関する齟齬[4]があっ

[4] 邦訳者の一人(荒金)は、その解説のなかで、この予備考察が「本論からある程度独立した一つの論

たとしてもそれほど問題がないとも考えられるかもしれない。だが後のデリダによる読解の変更(と思われるもの)を考慮すると、単なる内容の齟齬だけでは済まされない問題が存在していると思われる。したがって本稿での整理においては、『発生の問題』の内容を大きく分けて二つに分けて考えてみたい。その二つとは、「序論」と「序文」以降第四部までの二つである。

『発生の問題』の「序文」から第四部までにおいては、フッサールの著作に関してほぼ年代順に分析が行われ、その内容が吟味されている。『発生の問題』の大部分を占めるこれらの論述において強調しておきたい点は、フッサール哲学への「失望 déception」や、それに類する語が繰り返し語られていることである。それらの箇所で語られる「失望」は、フッサールの「志向的目的論」に対して向けられたものであった。

「志向的目的論」は意識の歴史的次元を捉えなおそうとする試みであり、歴史的諸事実のなかに「隠れた目的論」([VI: 16])の意味を探し求めることである[5]。フッサールの「志向的目的論」は歴史的探求として提示されるとしても、数学や幾何学などの理念性の起源を、その創始者の心的作用にのみ還元しようとするものではない。理念性が個人の主観的信条にすぎないとすれば、理念性がいかにして万人に妥当する客観性を持ちうるのかが説明できないからである。理念性が創始者によって能動的に発明された際には、当の理念性は既に万人に妥当するものとしての身分を備えていなければならなかった。したがって理念性の発生は、個人としての認識作用による能動的発生のみによっては説明できない以上、それに先立つ領域、すなわち「受動的発生」が問題化されねばならない。理念性の起源としての「受動的発生」、言い換えれば人類の歴史における理念の出現が「原創設」([VI: 6, 31])と呼ばれ、その歴史的意味内実が探求されることになるのである。

このような「志向的目的論」に対して、『発生の問題』「序文」では以下のように語られている。「受動的発生は、構成の最も起源的な契機として、あらゆる超越論的能動性の基盤となる層として、フッサールによって提示されていた[……]この受動的発生は、自我を歴史のなかに根付かせていたのだ。したがって、歴史哲学のなかで自覚される志向的目的論は、現象学のそれ以前のすべての段階を基礎づけねばならなかった。[……]しかし、起源的綜合へのわれわれの遡行のなかで、新たな失望がわれわれを待っている」([PG 39-40/44-45])。「序文」でのデリダにとって、フッサールの「志向的目的論」は解明すべき「錯綜」に着手していないものであった。理念の発生は事実的発生に先行し、かつ事実的発生以後に伝統において与えられねばならないとされ、「このような錯綜は、存在と時間との起源的で弁証法的な綜合を起点とするのでなければ主題化されえなかった」([PG 40/45])と述べられる。ここで「弁証法」という用語が用いられていることに注意しておきたい。「フッサールは「時間性を、非時間的な起源性によってすでに構成された形相的構造へと還元してしまった」([PG 41/46])のであり、この点においてデリダは「失望」を感じ、フッサール現象学では解決できないと思われた「錯綜」に対して「弁証法」という仕方でのアプローチを試みようとしたのである。

文」(邦訳 333 頁)であり、「いわゆる序論としての役割を果たしているかどうかについては、疑問の余地もある」(邦訳 336 頁)と述べている。

[5] フッサールによる歴史の捉え方については、［高橋 1992］を参照。

『発生の問題』第四部では、フッサールへの批判はより鮮明に語られる。たとえば哲学という理念の発生を「ヨーロッパ」と名指して論じた「ウィーン講演」[6]([VI: 314–348])に対して、デリダは「ヨーロッパ」という名称によっては理念性の起源が説明されないと述べる。「いかなる権利でヨーロッパを精神的な生誕の地と定義するのだろうか。いかなる権利でヨーロッパからその事実性を取り去って、ヨーロッパを他の経験論的な世界から区別するのだろうか[……]「ウィーン講演」は、[……]歴史についてのある理念から出発しながら、その理念の現実的発生とそれが歴史のなかに根ざしている事態とを説明することに絶えず失敗している」(PG 254–257/253–256)。

これら幾つかの引用が示すような、いささか性急とも思われるフッサール批判とは異なり、『発生の問題』の「序論」における批判的論調は控えめである。フッサールの「志向的目的論」に代わって弁証法が主題化されるにせよ、フッサールを出発点として思考を展開する正当性は認められている。「プラトン哲学からヘーゲル哲学までの最も強力な哲学的伝統を活気づけ動機づけている最大の弁証法的主題が、刷新されるとは言わないまでも、少なくとも基礎づけられ、真正なものとされ、成就されうるのは、明示的にフッサールにおいてではないとしても、フッサールを起点としてのみなのである」([PG, 7/7])。

この前後の箇所においてデリダがまとめたフッサールの立場は、理念の客観性のみに着目するものではなく、また理念の誕生という歴史的事実性のみに着目するものでもない。最初の立場は客観性を重視するあまり、その歴史的出現を説明できないし、後者の立場は、その歴史的出現のみを重視するために、客観性の地位を単なる被構成物として扱ってしまう。「序論」においては、こうした両者の立場にかんして、「どちらの場合もフッサール現象学の最も本来的な意図に不実なのではないか」([PG, 15/17])と述べられている。したがって、「序論」でのデリダの論調は、「理念のヨーロッパ的な発生」に対する先ほどの引用においてフッサールの対応を「もっぱら経験論的」であるにすぎないと述べていた論調とは、やや性質を異にしているように思われる。この差異は『発生の問題』においては目立たない仕方で包含されていたと思われるが、後で見るように、『発生の問題』と『幾何学序文』との間でより目立つ仕方で現れることになろう。次節では、これまで確認してきた論点に関して当時の現象学研究のうちの幾つかを取り上げ、デリダの論述の位置づけを概観してみたい。

3　フッサール後期思想に対する評価(一九五〇年代、あるいはそれ以前のもの)

現象学と関連して「歴史」が論じられる文献は当時幾つか存在していた。フッサール後期の著作を踏まえた論述のうち、早い時期のものとしてはまず一九四〇年にレヴィナスによって発表された論文「エトムント・フッサールの業績」([Lévinas])が挙げられよう。この論文では『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』について言及がなされており、レヴィナス自身もそれを読んでいることはおそらく間違いないのだが、フッサールの歴史哲学に対する評価は低いものにとどまっている。その理由としては、『論理学研究』から『厳密

[6] いわゆる「ウィーン講演」にかんしては邦訳（「ヨーロッパ的人間性の危機と哲学」『30 年代の危機と哲学』清水多吉・鈴木修一訳、平凡社、一九九九年、23–99 頁）を参照したが、引用の際には語句に若干の変更を加えた。

な学としての哲学』にいたるまで展開されるフッサールによる歴史批判の存在が考えられよう。少なくとも当時のレヴィナスにとっては、後期のフッサールによる歴史への接近は、それまでの歴史批判と相容れるものではないものとして映っていた[7]。「現象学的哲学の構想は、哲学の条件としての歴史というものに対するフッサールの不信の念を示している。そのことによって、すでに超越論的構成の理念の普遍性が主張されている。歴史そのものが思惟によって構成されるのであり、歴史は決して志向性と知解(intellection)のはたらきをつかさどることはないのである。後にフッサールは、構成された諸事物のうちに沈積した、思惟の「沈殿した」歴史を発生的現象学によって発見しようとするが、この発生的現象学もフッサールの反歴史主義を乗り越えはしない。[……]精神の最終的基底は、フッサールにおいて、歴史に対して異他的なものとして現れる」([Lévinas, 34/90])。

『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』への言及としては、カヴァイエスによる『論理学と科学の理論について』([Cavaillès])が存在する。彼の死後一九四七年に出版されたこの著書においては、現象学研究というよりもカヴァイエス自身の独特な歴史哲学が示されており、フッサールに対する評価も科学の教説(doctrine)との関連で論じられる。その際「歴史的探求の重要性」([Cavaillès, 76])が強調されるとしても、それは「失われたつながりが再発見されるかぎりで」(Ibid.)のことであり、カヴァイエスが歴史に取り組む際に重要視するのは、現象学的意識に対して現れる「様々な明証の諸類型」([Cavaillès, 77])である。「弁証法」や「発生」、「進歩」等の用語を用いて科学(あるいは学問)との関連が述べられてはいるのだが、この著書だけではやや断片的な記述であり、カヴァイエスにおける「歴史」の問題を論じるためには、別の著作あるいはより総合的なカヴァイエス哲学を参照する必要があると思われる。

チャン＝デュク・タオにより一九五一年に出版された『現象学と弁証法的唯物論』([Tao])では、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』をはじめ後期のいくつかの論文が論じられているが、フッサールが幾何学の起源を人間的実践に求めたことで懐疑論に陥ってしまったと考え、エンゲルスやヘーゲルを引き合いに出しつつ、弁証法による克服が必要であると論じることになる。一九五四年に出版されたリオタールによる『現象学』([Lyotard])においても、ハイデガー、サルトル、マルクス主義との関連で「歴史」が論じられており、広義の現象学運動としての記述ではありうるとしても、フッサールの後期哲学を適切に踏まえているとは言えないであろう。

本格的な後期フッサール研究として注目すべきは、一九四九年に発表されたリクールによる「フッサールと歴史の意味」([Ricœur])である。フッサールが歴史に考察を加えるようになった背景に「まさに歴史の悲劇」([Ricœur, 281])が存在していたことを指摘するだけではその現象学的意味を踏まえることにはならないのだが([高橋, 276. ff.])、フッサールにおいて歴史哲学が要請される理由と、それが直面する課題を同時に捉えようとするリクールの姿勢には学ぶべき点があるように思われる。リクールはフッサールの思想における自我の哲学としての側面と歴史哲学との関係を単なる断絶として捉えるのでもなく、また逆に単純な連続として捉えるのでもない。「いかにしてコギトの哲学、すなわちあらゆる存在者

[7] 『厳密な学としての哲学』と歴史哲学との整合性については、先ほど言及した高橋論文において詳しく論じられている。

を創設する自我への根源的回帰の哲学が、歴史の哲学を許容しうることになるのであろうか。[……]無限の課題として理解されるカント的意味での理念が割り当てられるところの、意識と歴史との媒介的役割が十分強調されるのならば、フッサールの思考の統一性がある程度まで見出されることになろう。その媒介的役割は、まさしく終わりなき発展を含意するのであり、したがって歴史を含意するのである」([Ricœur, 284])。リクールは心理学批判として宣言されたフッサールの論理学が、個人の意識や人類の歴史とは独立していることを確認したうえで、後期の超越論的現象学への歩みがただちに歴史への回帰に繋がるのでもないことに注意を向ける。「超越論的現象学の問題系があからさまに歴史的な関心を含むのではないし、さらにはその問題系は「超越論的還元」という予備操作により、歴史的な関心を排除するように思われる」(Ibid.)。

ではリクールの見るところ、歴史の問題を必要とするのはいかなる点においてなのだろうか。「イデーンⅠとⅡの水準においては、歴史のいかなる優位も存在しない」([Ricœur, 286])ことを確認するにせよ、超越論的現象学が徹頭徹尾歴史を排除するものではないとされる。リクールは「弁証法」という語を用いて、超越論的自我と歴史との間に包含関係が存在することを論じ、その点において歴史の問題は超越論的現象学にとっても重要な問題となるとされる。「一方で、絶対的意識において歴史的人間が構成され、他方で、歴史を発展させる意味(sens：方向)がこの意識を遂行する現象学者としての人間を含みこむということを、いかにして理解するのだろうか。含むものと含まれるもの(l'englobant-englobé)の弁証法、超越論的自我と歴史を統一する意味との間の困難な弁証法が告げられているように思われる」([Ricœur, 285])。

リクールはフッサールの問題設定を丁寧に辿りながらも、フッサールの歴史への取り組みに対していくつか批判的な言葉を残している。たとえばギリシアにおける哲学の誕生を強調する必要性を疑問視したあとで([Ricœur, 312])、フッサールの歴史哲学は最終的な困難を克服できないと述べる。「もし歴史がというものが、それが含むところの課題からその意味を引き出すとしたら、この課題の基盤(fondement)とは何であろうか」([Ricœur, 313])。これはおそらく先ほど引用した「含むものと含まれるものの弁証法」を踏まえた疑問であり、歴史において哲学(あるいは学一般)という無限の課題が見出される場合、有限で偶然に支配されているように思われる歴史から意味を引き出す正当性が疑わしくなるとリクールは考えていたように思われる。リクールはヘーゲルやデカルトを引き合いに出しつつ、フッサール自身の取り組みに対しては最終的には否定的な態度であったと言えよう。

これまで取り上げてきた諸研究においてはフッサールの歴史哲学を総体的に肯定する議論は存在せず、フッサールの含意を汲み取ろうとする議論はメルロ＝ポンティによって開始されたと思われる。現象学研究として有名な『知覚の現象学』には歴史についての具体的記述は存在しないが、一九五〇年から五一年にソルボンヌで行われた心理学の講義『人間の科学と現象学』([Merleau 1975])[8]において、そして五一年に発表された論文「哲学者と社会学」([Merleau 1960])において、フッサールの歴史哲学への検討が行われている。

メルロ＝ポンティはリクールが直面していた「含むものと含まれるものの弁証法」とい

[8] この著作の初版年を確かめることはできなかったが、一九五四年の『発生の問題』の書誌に含まれているので、『発生の問題』以前に出版されていたと思われる。

うような問題系に対して、フッサールが解決を与えていたことを立証しようとする。フッサールが批判する歴史主義や論理主義にも注意を向けることで、フッサールの歴史哲学が論じる「歴史」が単なる事実の寄せ集めではないことを論じるのである。メルロ＝ポンティの見解において、フッサールの立場は歴史主義や論理主義のどちらかを選ぶというような二者択一の思考に由来するものではない。「フッサールは生涯を通じて二正面作戦をとることになる。つまり一方で心理主義や歴史主義に戦いを挑むのだが、その場合の心理主義や歴史主義とは、人間の生活をそれに働きかける外的諸条件の単なる結果にすぎないとみなし、哲学的主体をも、まったく外部から規定され[……]懐疑主義の餌食となるものとみなす限りのものである。他方、論理主義への挑戦についても、その場合の論理主義とは、偶然的経験などに触れてみなくてもわれわれに真理への道を与えると主張するかぎりのものなのだ」([Merleau 1975, 14/22])。

このようなフッサールの立場を確認した後、メルロ＝ポンティはフッサールの述べている歴史における「理念」が「日付」を帯びており、「文化的形成物」であることに着目する。「ユークリッド空間もまた一つの文化的形成物であり、それが限界をもち「素朴」なところをもつという点において、知識の或る一定の段階に結びついていたのである[……]われわれの反省対象が幾何学的概念であってさえ、われわれはそれら概念の或る生成を発見できるはずである」([Merleau 1975, 66/83])。幾何学的概念でさえその「生成」、すなわち「歴史」における発見が必要である以上、さまざまな概念を後世に伝達するところの一つの「歴史」はあらゆる理念の前提であろう。その「歴史」を見出す営みが哲学であるのだが、「歴史」を見出す当の哲学それ自体も一つの文化的形成物であるのだから、哲学も「歴史」において自らの場を占めることになる。「では哲学の座とも言うべきものはどこにあることになろうか。出来事のなかでないことは明らかである。だが永遠なるもののうちでもない。哲学は歴史のなかに座を占めるのである。それも、次から次へと繋ぎ合わされた出来事の総体としての歴史ではなく――なぜならそういった出来事はお互いに相手を存在から追い出すのであるから――、考えることができ理解することのできる歴史 [……]においてである。哲学は、フッサールが「志向的歴史」と呼び、ほかの人たちが「弁証法」と呼んでいるもののうちにこそ、その座を占めている」([Merleau 1975, 66–67/84])。リクールが言うところの「含むものと含まれるものの弁証法」という問題は、「含むものと含まれるもの」の両方が「生成」するという動的な概念として把握されることで克服されているように思われる。

幾何学的概念でさえ「文化的形成物」であるのだから、逆に言えばまさに一つの文化にすぎないところのギリシアあるいはヨーロッパ的思考も、普遍性へと通じていることになろう。したがってメルロ＝ポンティにとっては、フッサールによる「ヨーロッパ」という用語法に異議を申し立てることはしないのである。「〔フッサールの思考において〕ヨーロッパにおける哲学と学問との歴史的展開には本質的な価値があるのであって、その伝統は引き継ぐ価値があるのである。というのも、或る種の概念はその本質からして、一歩一歩と歩みを運んでいかなければ獲得されないものであるからである[……]この知識は普遍的なものであるから、それを生み出した人たちのためにだけとっておくことや、その妥当範囲をヨーロッパ的生活様式にだけ限るということは論外である。[……]ヨーロッパ的排他主義というものほどフッサールに無縁だったものはない」([Merleau 1975, 67/84])。

ここまで概観してきた諸研究は、リオタールの著作を除き、『発生の問題』の文献表に記載されているので、デリダ自身は目を通していたはずである。『発生の問題』において「ヨーロッパ」というフッサールの用語法に疑問を呈していた点にかんしては、デリダの立場はリクールの見解を引き継いでおり、『幾何学序文』で「ヨーロッパ」という用語法を肯定する点においては、メルロ＝ポンティの立場に類似しているかのように見えるかもしれない。だが『幾何学序文』ではレヴィ＝ブリュールに宛てられたフッサールの書簡の解釈をめぐってメルロ＝ポンティに異議申し立てがなされており[9]、メルロ＝ポンティの立場に完全に同意するわけではない。またフッサールの立場に賛成か反対かということで議論の内実が規定されるわけではないので、デリダがどのような根拠で議論を展開しているのかを辿る必要があるだろう。

4 フッサール批判の内実と『幾何学序文』

『発生の問題』と『幾何学序文』との読解の「ずれ」を検討する前に、「ウィーン講演」の内容を確認しておこう。この講演の目的は「ヨーロッパにおける人間性の歴史哲学的理念(あるいは目的論的意味)を展開すること」([VI/314])である。ここでの「ヨーロッパ」という名称は、単に地理的に限定された領域を示しているだけではない。フッサールは「ヨーロッパ」という名称を選ぶことにより、それまでには存在しなかった新しい認識様式の誕生を名指そうと試みる。学問的理念は、常に自らを遍時代的に妥当するものとして提示するが、学問的理念が人類の誕生以前に既に存在していたわけではないのだから、その理念も歴史において過去に発生したものである。フッサールは学的理念の発生を、ヨーロッパにおける「ギリシア人」のうちに求めようとした。「精神的なヨーロッパにはその生誕の地がある。私は生誕の地という言葉で地理学的なある土地を(それはそれで確かに正しいのだが)指しているのではなく、一民族における、及びこの民族の個々の人間と人間集団における精神的な生誕地を意味しているのである。それは、紀元前七世紀と六世紀の古代ギリシア民族である。この民族のなかから周囲世界に対する個々人の新しい種類の態度が生まれた。彼らの態度の一貫性によって、完全に新しい精神的形象が現れ、その新しい精神的形象は急速に体系的に完結した文化形態へと成長した。つまり、ギリシア人は、そのような形態を、哲学と名づけたのである」([VI/321])。

理念の発生を「ギリシア人」に求めることに対して、デリダは『発生の問題』第四部においてその試み全てを否定するのではない。『発生の問題』第四部において、フッサールへの評価は最終的には否定的となるにしても、フッサールが「ヨーロッパ」という名称を用いることにおいてある理念が問題になっていることは肯定される。「ヨーロッパは、地理的限定、政治的限定、あるいはその他の限定を受けるような「内世界的な」意味では理解されていない。[……]ヨーロッパを理解するためには、ある理念から、ある純粋でアプリオリな意味作用から出発せねばならないのだ。[……]それは哲学という理念であり、この理念はその絶対的な独自性においてヨーロッパ的な理念なのだとフッサールはわれわれに述べる」([PG, 249–250/248–249])。こうした留保に続き、デリダはフッサールが理念の発生

[9] cf. [OG, 116ff. /173ff.]

を説明し損ねていることを批判する。『発生の問題』第四部でのデリダにとって、フッサールの用いる「ヨーロッパ」はその固有の名称ゆえに経験論的事実へと回収されてしまうものとして論じられている。「もし哲学という理念あるいはヨーロッパという形相が精神的な生誕の地を一つしか持たないのであれば、その誕生の地は、まったく厳密に、時間と実在的空間のなかで位置が確定された古代ギリシアのある現象と同一視されうる。このようにして、哲学という理念は一つの事実に帰されるのである」([PG, 252/251])。フッサールの論述が結局のところ「事実」のレベルにしか見えない理由を、デリダは「発生論的問題」が解決されていないことに求めている。「発生論的問題」とは、普遍的理念の発見とそれ以前の状態との「断絶」が一見矛盾を引き起こす事態を指している。普遍的理念は今ここだけで妥当するものではなく、いつでもどこでも妥当するものとして現れるが、何かが「誕生」することは、歴史における特定の時間に帰属するものである。歴史的偶発事としての「誕生」と、普遍的理念との間には「断絶」が存在し、そのことによってフッサールの「目的論」は失敗に終わるとされる。「もしある特定の時代に人類が哲学的態度を開始したのであれば、人間の歴史的時間性は一つの断絶(une rupture)を経験したことになる。いかにして人類は、哲学の無限的課題についての無知から自覚へと移行したのだろうか。[……]超越論的可能性がつねにすでにそこに存在するのである以上、その可能性を呼び覚ます行為は超越論的な「誕生」なのだろうか、それとも経験論的な「誕生」なのだろうか。それは歴史的な偶発事以上のものなのだろうか。無限的課題は、その本質に従って、つねに起源的に現前的あるいは可能的であるが、その課題を「自覚する」行為は起源的ではない。このことは、この目的論の基盤全体を崩してしまう」([PG, 252–253/251–252])。

『発生の問題』第四部でのデリダの眼には、「目的論」とその歴史における「誕生」は、少なくともフッサールによる記述の仕方では両立しえないものとして映っている。「意味創出の一切の起源的契機は、ある「伝統」を、すなわち事実性としてすでに構成されたある存在を前提とする。もし、究極的な場面において、この純粋な事実性が人間の活動によって構成されていないのだとすれば、この活動の最初の段階は、構成された意味と予め構成されていた事実との起源的綜合である。この綜合は解体されない。それでは、純粋な起源性とはいかなるものなのだろうか。それは超越論的なのだろうか、それとも事実的なのだろうか[……]これは「幾何学の起源」の水準では提起することのできない問いである」([PG, 264/263])。デリダが強調するのは、理念の純粋な起源が存在しないとする「起源的綜合」という思考であり、フッサールの立場は「起源的綜合」を考察する弁証法としては不十分なものと考えられていたと思われる。

こうしたフッサールへの批判は、デリダの感じた「不安や躊躇や更には反論」の一つとして理解すべきものである。というのも、『発生の問題』第四部でのフッサール評価が、後の著作では逆転しているように見えるからである。『幾何学序文』において、デリダはフッサールの「ウィーン講演」や「目的論」に対し、肯定的評価を与えている。「フッサールは、幾何学の純粋な意味とその内的歴史について語ると同時に、しばしば述べるとおり、理性の普遍的目的論がギリシア・ヨーロッパ的自覚以前にも人間の歴史に働きかけていたとか、純粋な理念性は縛られた理性において自らを告げるなどと語ることができる。このようにして彼は、個々の伝統的系譜の内的意味ないし歴史性の絶対的根源性と、普遍的歴史性の

内部でのその「相対性」とを同時に救い出す」([OG, 142/210]) [10]。このように肯定的にフッサールを捉えることができたのは、デリダが超越論哲学への理解を深めたということが理由の一つとして考えられよう。『幾何学序文』においては、『発生の問題』第四部で記述されていたような、「超越論的な」問いと「事実的」問いとの単純な対置は行われていない。「最初の哲学的活動は[……]この歴史的合理性を自覚することに他ならない。目的論的理性は、歴史に歴史性という純粋な意味を、すなわち歴史の意味そのものを告知することによって、人間性をみずからへと誕生させる哲学的な自覚以前にすでに、さまざまな経験的な型をとる人間性に住まっていたのである。既に現存したものの自覚はある一つの断絶(une rupture)を、したがって根底的かつ創造的な起源を示している。潜在的な志向のみずからへのあらゆる誕生(naissance)は、すべて再生(renaissance)である」([OG, 161–162/242])。目的論の歴史的現出の問題について、『発生の問題』第四部においては、哲学的自覚と無自覚との間の「断絶」として現れ、この「断絶」がフッサールの「目的論」を挫折させると論じられていた。というのも、「断絶」は理念の発生との差異を解消できないことで、「創造」あるいは「発生」の側面を説明するのみであり、単なる歴史的事実の水準に回収されてしまうものであった。しかし『幾何学序文』においては、まったく同じ「断絶」という語句が、「創造的」であるがゆえに歴史的でもある契機として肯定的に評価される。なぜなら「断絶」により発見される哲学的自覚は、既に人間に住まっていたものとして再発見されたものであり、理念性の発見は「潜在的な志向」の「再生」に他ならないからである。「再生」は既にあったものをもう一度活性化することであり、「既に」という性質において、「再生」は「伝統性」と結びつく。「伝統性」とは事実の単なる積み重ねではなく、「既に」存在していたものが時間・空間の差異を超えて存在しうる可能性を指している[11]。この「伝統性」への着目によって、デリダはフッサールのうちに単なる「ジレンマ」[12]を見ることなく、「志向的目的論」における超越論的哲学の含意を正当に評価できるようになったのである。『発生の問題』と『幾何学序文』におけるの強調点の違いは、単に立場が変更されたことによる帰結ではなく、デリダによる超越論的哲学の厳密化あるいは徹底化として考察されるべきものである。

5 超越論的哲学と「伝統性」

ではなぜ「伝統性」を論じることが超越論的哲学の徹底化に繋がるのだろうか。理念性の出現は、理念性にかんする無自覚から自覚への移行であるが、その最初の出現においてさえ「再生」に他ならない。言い換えれば、理念性の出現はその「誕生」においてそれに先立つ仕方で存在していたとされるものに「遅れて」しまっており、理念性はその初回の

---

[10] 『幾何学序文』においてフッサールによる「ヨーロッパ」という名称の選択が肯定されているとしても、その選択がまったく問題がないということを意味するのではない。デリダは後年になって再び「ヨーロッパ」という語をめぐって考察を行うが、その名称の選択が持つ意義と問題点とを同時に指摘することになる。cf. [Derrida 1991]

[11] 『幾何学序文』では「伝統」という語は「伝播運動と遺産相続を合わせて含意するこの語の両義的意味において」(OG, 4/9)考察される。

[12] 「フッサールにジレンマを見ることほど、彼に対して不誠実なことはあり得ないだろう」(OG, 164/244)。

出現においてさえ、自らのうちに「既に」という性質をも含んでいることになる。理念性の出現において、「遅れ(le retard)はここでは哲学的絶対者である」([OG, 170/250])と『幾何学序文』において述べられているのは、この事情を指していると思われる。この「遅れ」が「絶対者」であると述べられる理由は、それが決して解消できないものであるからである。理念性の出現においては常に「遅れ」が生じること、言い換えれば理念性の起源において常に自身のうちに「差異」が含まれてしまうこと、このことは『幾何学序文』においてようやく明確に認められることになった。この「差異」の解消不可能性が理念性を可能にする条件であり、経験論的発生と理念的客観性を同時に可能にするものである。この「差異」が理念性の可能性の条件であるかぎりで、「超越論的なもの」と呼ばれることになるのである。「絶対的起源の根源的差異(la Différence originaire)、それはおそらく、そのさまざまな変遷の謎めいた歴史を通じ、「超越論的」という概念のもとで語られてきたものである。[……]超越論なものは、差異(la Différence)であろう」([OG, 171/250–251])。メルロ＝ポンティが論じていた「歴史」も理念を可能にする条件であるという点において、「超越論的なもの」と呼んでよいと思われるが、デリダの「差異」とは若干ニュアンスが異なる。この点については後で簡単に触れることにしよう。

上記引用で述べられた大文字の「差異」は、のちに「差延」として論じられることになると思われるが[13]、問題はこうした超越論的哲学が『発生の問題』においては、不十分にしか語られていないことである。『発生の問題』第四部において「伝統」という語は、デリダの眼には「経験論的現象」としてしか映っていない。「再顕在化のアプリオリな可能性と称されるものは、何らかの形で構成されたある伝統を必ず前提することになる。[……]しかしながら、「伝統性」(traditionalité)そのものは、フッサールによってつねに経験論的現象として定義されている。それは、例えば、諸理念の伝達と相続を次第に易しくするような諸技術の獲得である」([PG, 264/263])と述べられる。この本文に対する脚注において、「しばらく後になって私は、この部分の脇に、「否、再検討が必要！(Non. A revoir!)」と書き留めた」([PG, 264/328])と、一九九〇年の出版に際して付記されている。内容にかんする重要な訂正であるこの箇所は、デリダ自身が感じていた「不安や躊躇や更には反論」の最も顕在的なものであると言えよう。「伝統」という語が、『発生の問題』から『幾何学序文』への移行において、「単なる経験論的現象」という身分から、理念的対象の歴史性としての重要性を担う役割が与えられたことは、デリダにおける超越論的哲学の厳密化・徹底化の証左となるように思われる。

6 結語

デリダ自身も述べているように、『発生の問題』において既に後の思想展開を髣髴とさせるような発想も見られ、『発生の問題』がデリダの出発の書として重要性を持つことに異議はない。しかしデリダによるフッサール読解は、少なくともその初期において姿を変えていたのであり、『発生の問題』がそのまま後のデリダの思想を形成したとは言えない。むしろ『幾何学序文』における「伝統性」の評価こそ、後のデリダにとって重要な意味を持っ

[13] Cf. [荒金 2005, 164–165]

ていたように思われる。メルロ＝ポンティは「超越論的なもの」を「歴史」として理解していたが、デリダはそれを「伝統性」あるいは「差異」として理解した。フッサール後期思想から「差異」を取り出すことは、フッサール現象学からの離脱を既にしるしづけているように思われる。この点はメルロ＝ポンティの歩みと異なる点であろう。だがデリダにとって「超越論的なもの」を「差異」と重ねることは、後の自らの思想にとって欠かせぬ歩みであったように思われる。デリダは後の論文「差延」において以下のように記述している。「われわれは差延によって次のような運動を指示しよう。すなわちその運動に従って言語が、あるいは一切のコード、一切の送り返しシステム一般が諸差異の織物として「歴史的に」構成される、そうした運動のことである」[Derrida 1972, 12–13/49]。ここで「歴史的」という語が括弧に入れられているように、歴史に対する警戒感はなお残りながらも、「歴史性」それ自体に対する再検討と肯定は、後年のデリダにとって重要な論点となる。この点はおそらく『発生の問題』ではまだ不十分にしか論じられていなかったように思われる。

文献

[PG]: Derrida, Jacques. *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*. Paris : PUF, 1990. （ジャック・デリダ 『フッサール哲学における発生の問題』、合田正人・荒金直人訳、みすず書房、二〇〇七年）

[OG]: Derrida, Jacques. *L'Origine de la géométrie de* Edmund Husserl, Introduction et traduction. PUF, 1962. （エドムント・フッサール、ジャック・デリダ 『幾何学の起源』田島節夫ほか訳、青土社一九七六年）

[Cavaillès]: Cavaillès, Jean. Sur la Logique et la theorie de la science, PUF, 1947.

[Derrida 1972]: Derrida, Jacques. “La différance” pp. 12-13. in : *Marges de la philosophie*. Minuit, 1972. （ジャック・デリダ『哲学の余白 上』、高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、二〇〇七年）

[Derrida 1991]: Derrida, Jacques. *L'autre cap : suivi de La Démocratie ajournée*, Editions de Minuit,1991. （ジャック・デリダ 『他の岬 —— ヨーロッパと民主主義』、高橋哲哉、鵜飼哲訳、みすず書房、一九九三年）

[Derrida 1999]: Derrida, Jacques. *Sur parole – Instantanés philosophiques,* Éditions de l’Aube, 1999. （ジャック・デリダ 『言葉にのって』林好雄ほか訳、ちくま学芸文庫、二〇〇一年）

[Lévinas]: Lévinas, Emmanuel. “L’ œuvre d’Edmund Husserl”, in *En découvrant l’existence avec Husserl et Heidegger*, Vrin, 1967. （エマニュエル・レヴィナス 「エトムント・フッサールの業績」『実存の発見』、佐藤真理人ほか訳、法政大学出版局、一九九六年）

[Lyotard]: Lyotard, Jean-François. *La Phénoménologie*, PUF, 1954. （ジャン・フランソワ・リオタール 『現象学』高橋允昭訳、白水社、一九六五年）

[Merleau 1960]: Maurice Merleau-Ponty, “Le philosophe et la sociologie”, in *Signe*, Gallimard, 1960.（メルロ＝ポンティ 「哲学者と社会学」『シーニュ 1』、竹内芳郎監訳、みすず書房、一九六九年）

[Merleau 1975]: Maurice Merleau-Ponty, *Les sciences de l’homme et la Phénoménologie*, CDU, 1975.

（メルロ＝ポンティ 「人間の科学と現象学」『眼と精神』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、一九九九年）
[Ricœur]: Ricœur, Paul. “Husserl et le sens de l’histoire”, in *Revue de Métaphysique et de Morale*, vol. 54, 1949. pp. 280-316.
[Tao]: Tran-Duc-Tao, *Phénoménologie et matérialisme dialectique*, Paris, 1951. （チャン・デュク・タオ 『現象学と弁証法的唯物論』竹内良知訳、合同出版、一九七一年）
[荒金 2005]: 荒金直人「初期デリダのフッサール研究に於ける弁証法から差延への用語的移行」『フッサール研究　第 3 号』、二〇〇五年
[高橋 1992]: 高橋哲哉「歴史における相互主観性　――フッサール後期思想の一側面――」『他者の現象学』新田義弘・宇野昌人編、北斗出版、一九九二年